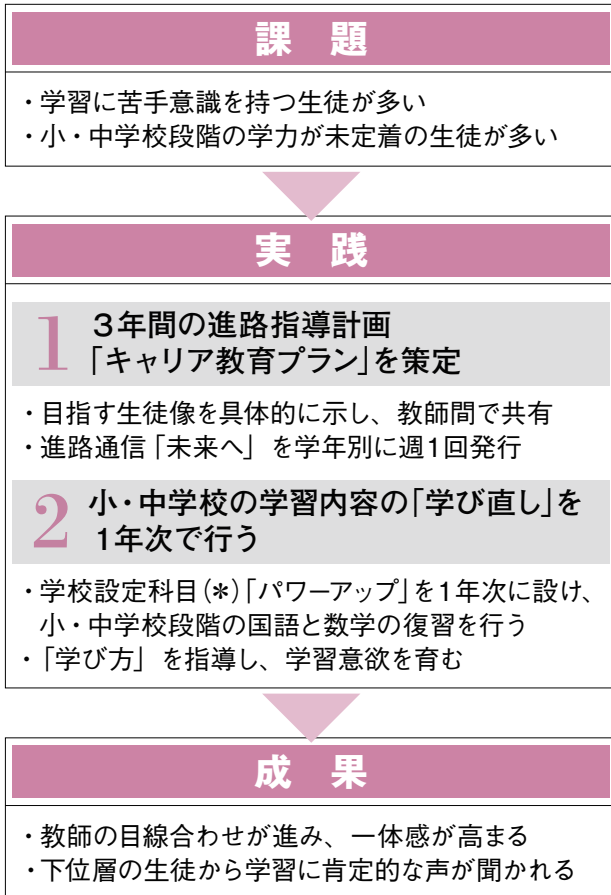


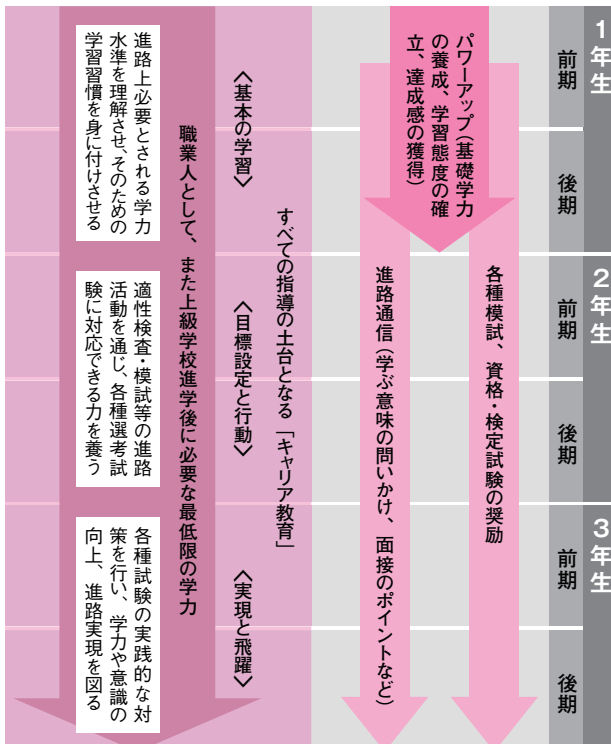
キャリア教育を柱に 3年間を見通した指導計画を作成

宮城県黒川高校

高校では、育成したい生徒像の実現に向け、3年間を見通した進路指導と教科指導が注目されている。宮城県黒川高校の取り組みから、3年間をかけた生徒の学習意欲と基礎学力を向上させる指導計画づくりの可能性を探る。



3年間の指導の流れ



School Data

◎1901(明治34)年、黒川農学校として開校。「公正・友愛・開拓」を校訓に、健全な判断力と社会性を備えた人材の育成を目指す。2009年度に県から「産業人材育成重点化モデル事業」の指定を受け、学校改革を推進している。



校長◎倉光恭三先生

生徒数◎677人 学級数◎18学級

形態◎全日制/共学/普通科・機械科・電子工学科・環境技術科

09年度進路実績◎大学・短大31人、専門学校等41人、就職81人

所在地◎〒981-3685 宮城県黒川郡大和町吉岡字東柴崎62

TEL◎022-345-2171

URL◎<http://www.kurokawa.myswan.ne.jp/>

* 学習指導要領に定められた教科の下に、学校が独自の裁量で設定できる科目

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第1回

学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

小学校時代から低い自己肯定感 意欲と基礎学力の向上が急務

宮城県黒川高校は、2008年度からキャリア教育を軸にした学校改革に取り組んでいる。同校は普通科、機械科、電子工学科、環境技術科の4科を持つ専門系高校で、地域密着型の公立高校として幅広い生徒を受け入れてきた。しかし近年は、成績による輪切り受検の影響もあり、成績上位層の入学者が少なく、学習に苦手意識を持つ生徒が多数を占めている。教務部長の岩手正浩先生は、生徒の実態を次のように話す。

「本校には、学力面で課題を抱える生徒が多数入学してきます。入試の答案を見ても、誤字や脱字が多く、計算問題も満足に解けていない状況で、入学後、授業についていけない生徒が相当数います。本校での指導経験が長い先生でしたら生徒の実態を踏まえて指導できますが、転任してきた先生は授業をどのレベルに合わせれば良いか分からず、授業の展開に戸惑うこともあります。結果、生徒との信頼関係がうまく築けず、問題行動を起こす生徒が後を絶たない傾向が続いていました」

学習意欲の面でも、人口の少ない地域特有の問題を抱えている。中学校での勤務経験もある中根恵治先生は、次のように説明する。

「本校は、地元の黒川郡出身の生徒が8割を占めます。小学校と中学校が1校ずつしか

ない町村もあるため、小学校で勉強が出来ないというレッテルを貼られてしまうと、『自分には出来ない』という気持ちを引きずったまま高校に進学してきます。性格は素直な半面、新しいことに一歩踏み出す力が弱いのは、そういう自信の無さからくるものだと思います。劣等感を乗り越え、前向きに学びに向き合えるような指導が、本校の生徒に必要でした」

目指すべきゴールを明示し プロセスを明確にする

同校は、生徒指導とキャリア教育の二本柱で改革を進めた。生徒指導では、遅刻指導や挨拶指導など基本的な生活習慣の定着、服装や集会指導における規範意識を3年間を通して徹底させ、落ち着いて学習に取り組める環境づくりを目指した。

改革を先導する倉光恭三校長は、「学習の基本は生活指導です。基本的な生活習慣が定着していない生徒は、学習がおぼつきませんし、技術も習得できません」と強調する。

キャリア教育は、09年度に始めた「キャリア教育プラン」を土台に進めている。それまでの進路指導は、学科や学年の裁量に任せられ、学校全体として目指すべき方向が共有されていなかった。そこで、3年間を見据えた学校全体としての指導計画を立て、目指すべきゴール、そのためのプロセスを明確にした。

「先生方は普通、起承転結の『起』から説



宮城県黒川高校校長
倉光恭三 Kuramitsu Kyozo
「最前線にいる先生と管理職はパートナー。常にワンランクアップを目指し、変化し続けたい」



宮城県黒川高校
教務部長 岩手正浩 Iwate Masahiro
「知ることの楽しさを生徒に伝えていきたい」



宮城県黒川高校
丸山泰史 Maruyama Taishi
進路指導部長。音楽科担当。「どんなに高い壁に当たっても決して生徒のせいにはせず、あきらめない」



宮城県黒川高校
大友正治 Ootomo Masaharu
国語科担当。「常に『やさしく明るく頼もしく』をモットーに生徒と接する」



宮城県黒川高校
中根恵治 Nakane Keiji
数学科担当。「いつまでも情熱を持って、本気で生徒にぶつかってほしい」

き起こし、なぜそれをするのか、そのために何をやるのか、ゴールはどこにあるのかと考えます。一方、私たち管理職は3年後の卒業を『結』としてゴールを明確にし、そのために何をすべきかという計画を立てることが仕事です。先生方は意識も高く実行力もあるのですが、ゴールをきちんと示せばパワフルに取り組んでいただけと考えました」（倉光校長）

すべての進路行事について 目的と方法を明確化

同校のキャリア教育は、職業観や勤労観、社会人としての規範意識といった就職に必要な能力の育成に加え、「必要最低限の学力の習得」も重要な柱としている。

3年間の進路計画の策定に当たり、同校では開校以来の校訓「公正・友愛・開拓」をベースとして「目指す生徒像」を明確にするところから始めた。「グローバル化する社会の中でよき職業人・社会人として働いていける資質と能力を身に付けた生徒」「上級学校での学習に取り組んでいける学力・学習習慣・興味関心を身に付けた生徒」の二つである。そして、この目標達成のために身に付けさせた力として、進路選択に必要な自己理解や適正な勤労観・職業観、コミュニケーション能力、更に就職・進学で求められる必要最低限の学力を掲げた。

「進学にせよ就職にせよ、将来を生きるために必要な力は単発的な取り組みでは身に付きません。『なぜ学ぶのか』を自らに問い、理解し、目標のために頑張ろうという意欲を持たせるためには、3年間かけて学校ぐるみで指導することが必要です。本校ではその取り組みの柱にキャリア教育を据えています」
(倉光校長)

進路指導部長の丸山泰史先生は、「既存の

進路指導計画を改善し、いつ、何を、どのように実行するかを明確にしました。その結果、教師は非常に動きやすくなり、教師間の指導のばらつきも減りました。生徒の学校に対する信頼感も高まっていると感じます。それらは、生徒の進路意識や学習意欲の向上にもつながると思います」と期待を寄せる。

国語・数学の学び直しで「学び方」を学ぶ

必要最低限の学力を身に付けさせるため、同校では各学年の目標を図1のように位置づける。1年次では、進路選択上必要とされる学力水準を理解させ、学習習慣を身に付ける。2年次では進路行事を通じて各種選考試験に対応できる力を付け、3年次では各種試験の対策と学力向上、進路実現を図る。

基礎学力の定着を目指した取り組みの一つは、1年生を対象とした「学び直し」だ。学校設定科目「パワーアップ」として国語と数学を各1コマ設け、小・中学校レベルの復習に取り組み、1年間かけて高校の授業に必要な基礎力を付けさせる。

授業はプリント学習が中心で、教科担当者が1人と他教科の補助教師2人が指導に当たる。プリントは3枚構成で、1・2枚目は身に付けるべき必須事項、3枚目は早く終わった生徒のための応用問題である。1枚目は、国語は漢字の書き取り、数学は基礎的な四則

図1 3年間の指導の流れ

	1年生	2年生	3年生
内容	進路上必要とされる学力水準を理解させ、そのための学習習慣を身に付けさせる	適性検査・模試等の進路行事を通じ、各種選考試験に対応できる実力を養う	各種試験への実践的な対策を行い、学力向上・意識向上・進路実現を図る
該当する取り組み	<ul style="list-style-type: none"> 学び直し「パワーアップ」 小論文・作文模試 SPI模試 進路通信「未来へ」 	<ul style="list-style-type: none"> ライフプラン作成 各種模試 朝学習 二者・三者面談 進路通信「未来へ」 	<ul style="list-style-type: none"> 各種模試 面談 面接・小論文指導 進路通信「未来へ」

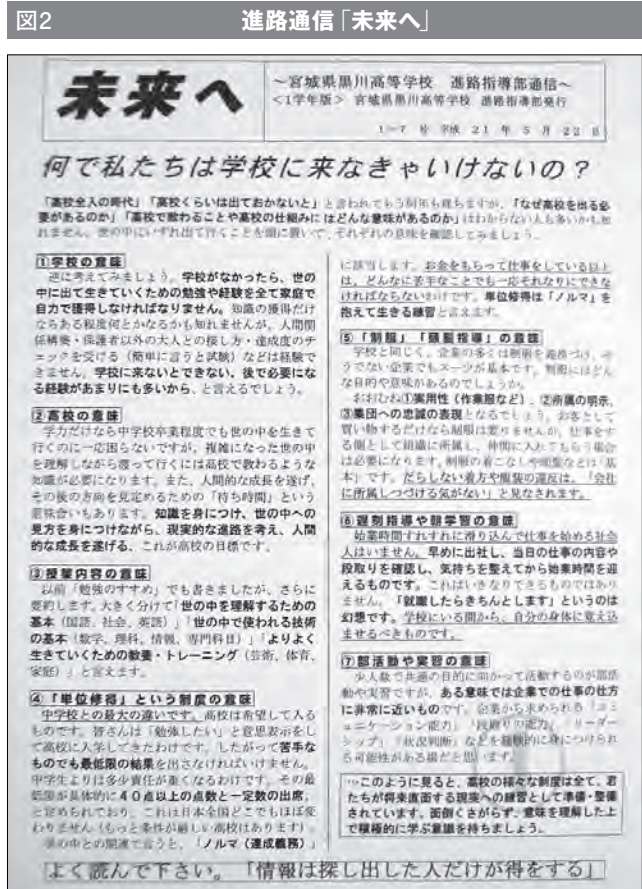
演算。最初の10分間でこれに取り組んで自己採点を行い、間違った箇所については、国語は10回書き取り、数学は正解するまでやり直す。次いで2枚目に取り組み、再び自己採点を行い、全問正解者は3枚目に取り組み。3枚目の応用問題は、国語では語源や由来、対義語・類義語などの調べ学習、数学ではより高度な文章題が中心となる。

「パワーアップ」では基礎学力だけでなく、学習の仕方を学び、やれば出来るという達成感も重視している。国語科の大友正治先生は次のように述べる。

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第1回

学力下位層を伸ばす3か年のストーリー



各学年とも毎週金曜日に配付。配りっぱなしにならないよう、金曜日の朝学習の時間に感想文を書かせ提出させる

進路意識や学習意欲を喚起するもう一つの工夫は、進路指導部が学年ごとに週1回発行する進路通信「未来へ」だ。働く意味について、フリーターと正社員の違い、ビジネスマナーの知識など、生

徒の進路選択・決定に必要な情報を、各種ガイダンスや模試、インターシップなどの時期に合わせて提供する(図2)。例えば、1年生の1学期には「勉強のすすめ」「学校に来る理由」などのテーマで学ぶ意味について考えさせる。

「基礎学力が身に付いていないと、将来どのような不自由が生じるかを、高1段階では具体的にイメージできていません。職業と学習の関係を1年生のうちから意識させようとしています」(丸山先生)

3年間を見通したキャリア教育プランの策定により、指導の方向性も統一された。これまでは新しい取り組みを行おうとする否定的な議論が始まることも多かった。しかし、多くの教師から生徒の変化を実感する声がかかるようになったこともあり、今は「まず3年間の計画に沿って始めてみよう」という雰囲気がある。

倉光校長は「本校で起きている変化は、すべて先生方自身が努力を積み重ねてきた成果です。生徒の変化が更に先生方の自信につながっていると感じます」と評価する。

10年度からは、学校への帰属意識の醸成に取り組み始めた。校舎の前に校旗を掲げ、日ごろから生徒が意識できるように、校訓を昇降口の上に掲示した。「黒川高生」としての誇りを持たせることで、更なる学習意欲、進路意識の向上につなげたいと考えた。

「やさしい問題から始め、やれば出来るという自信が付くようにしています。また、辞書や資料集の使い方が分からない生徒や、教師に質問できない生徒もいます。分からない点を人に聞くということも含めて勉強の仕方を身に付けることで、意欲的に学びに向かう姿勢も育てたい。それらはすべて2、3年生で本格化する進路実現の土台となるのです」

教科指導と生徒指導が一体となっている点も、「パワーアップ」の大きな特徴だ。授業前の挨拶では制服をきちんと着て、シャツの襟を正す。忘れ物をした場合は、反省文を提出するまで次の課題に進ませない。学びにふさわしい態度と環境はどういうものなのか

も、改めて学び直すのである。こうした08年度からの改革の結果、生徒の生活態度は目に見えて改善されていった。毎日60人ほどいた遅刻者は今では10人程度までに減り、以前は6%程度だった退学率は今では3.3%へと減少した。また、国語では、「基礎が身に付いていないことが分かり励みになった」という生徒、「漢検を受けた」という生徒も現れた。数学では、四則演算を繰り返し行うことにより、計算に抵抗感を覚える生徒が減ったという。

時期に応じた情報提供で進路意識や学習意欲を刺激